

幸せを考えさせる国

吉川左紀子(こころの未来研究センター長)
Sakiko YOSHIKAWA

2010年の後期から始まった、京都大学ブータン友好プログラムに参加している。当初、このプログラムのことを知ったとき、私は「え、ブータン? どこにある国ですか?」というくらい白紙の状態だったが、秋の曇り空のブータンを1週間ほど旅したあとは、この国のもつ不思議な魅力に惹かれ、強い関心をもつようになった。

ブータンといえば、知る人ぞ知る「国民総幸福 (Gross National Happiness)」を政策にかかげる、ヒマラヤ山脈の中腹にある人口70万の小さな王国である。インドと中国に挟まれた発展途上国で、国としての生計をたてるにはインドや日本を含む外国からの援助が必要である。地方の農村では、今でも電気のない生活をしている人たちがいるし、東西に一本走っている幹線道路は、片道1車線の狭いワインディングロード。国の面積は九州よりも少し小さいくらいだが、西の端から東の端まで移動するのに2,000mから3,000m級の峠をいくつも越えねばならず、3日以上かかるという大変不便な国でもある。こんな「客観的」描写から思い浮かぶのは、幸せとはずいぶん距離のある国なのではないだろう



タシチョゾン。国王執務室とブータン仏教総本山がある

か。

ところが実際に行ってみると、不思議なことに、ここは幸福を国の政策にかかげるのにふさわしい国だなあ、と納得できるのである。一体どうしてだろうか……。

考えても理由がよく分からないときには、自由連想という方法を使ってみるのが一番だ。私の最初の滞在は、1週間ほどの短い期間だったが、旅で知ったブータンの人たちの印象を思い出すまま並べてみると、こんな様子になる。

1) 祈る人たちである(寺院にも学校にも病院にも、大きなマニ車が備えてあり、通りかかった人が習慣のようにそれを回してゆく)。2) 謙虚だが誇り高い人たちである(行政府の人たちの言葉のはしばしから、国の将来に対する使命感を感じた)。3) おいしいお茶とお菓子をふるまう人たちである(役所や民家で出されるお茶がいつもおいしかった)。4) 教えること、教わることを大切にしている人たちである(立ち寄った小学校や大学で、生徒や学生が生き生きと楽しそうだった)。

2度目、3度目の旅で出会った人たちとのやりとりや観察から、さらに次のようなことにも気が付いた。

5) 現世のことだけでなく、前世や来世のことも考える人たちである。6) 伝統衣装をおしゃれに着こなす人たちである(色遣いや



ブータン仏教のお祭り(ツェチュ)。2011年7月10日、クジェラカンで撮影

着こなしに気を配り、寺院のお祭りでは小さな子どももきちんと正装する)。7) 虫を殺さない人たちである(そのせいだろうか、ハエものんびりしていて手で追ってもすぐには飛ばない。不思議だ……)。

祈り。生きる姿勢。人をもてなす心。育み導くこと。生と死。美の意識。命と自然への敬意。まだ直感に過ぎないが、ブータンの今のあり方をじっくり考えることで、日本人のあるべき姿につながる世界が見えてくるように思える。ブータン政府で働く日本人女性の話では、ブータンの首相は「幸せはひとりひとりが感じる主観的なもの。自分たちは幸せを目指した政治をするだけ」と、とてもシンプルだそう。

「そして、おじいさんとおばあさんは、末長く幸せに暮らしましたとさ」。ブータンを旅していると、なぜか日本の昔話にでてくるこの最後のフレーズが思い浮かぶ。この「幸せ」は、人との暮らしの中の、素朴で穏やかな幸せの感覚だろう。このシンプルさと、それを実現するむずかしさ。

ブータンは、私たちに、幸せを考えさせる国である。